

平成 27 年 11 月 27 日

各 位

「沖縄県内の最近のホテル稼働状況について」の発表について

りゅうぎん総合研究所は、本日、トピック「沖縄県内の最近のホテル稼働状況について」を発表いたしました。

県内のホテル稼働状況は、需要の高まりをうけて客室稼働率に加えて客室単価も上昇しており、ホテル業界全体が好調であることが示されています。

株式会社りゅうぎん総合研究所
代表取締役社長 池端 透

担当 : 城間 秋乃
連絡先 : 098) 835 -4650

トピック：沖縄県内の最近のホテル稼働状況について

1. はじめに

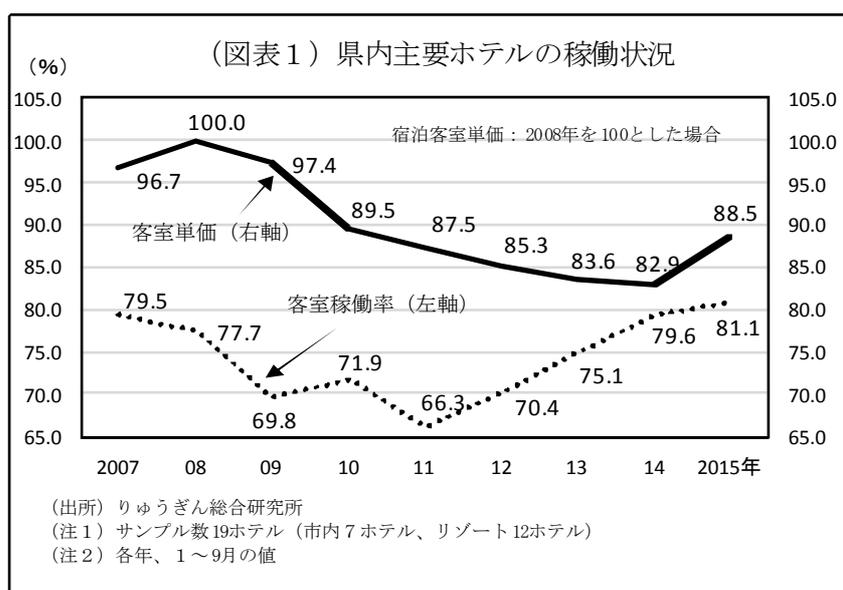
2008年9月のリーマンショック以降、県内主要ホテルの稼働状況は、景気後退に加え新設ホテル建設ラッシュによる需要の奪い合いなどからしばらく低迷した。しかし、2012年度からはじまった沖縄振興予算の増額や2013年からの量的・質的金融緩和政策などから県内の景気は底入れ後回復し、2013年ごろに拡大に転じた。景気の拡大にともない、ホテル稼働状況も客室稼働率、客室単価ともに上昇傾向にある。

そこで、ここでは足元のホテル稼働状況はリーマンショック前のピーク時の水準に回復しているかをみるために、リーマンショック前年の2007年から直近2015年9月までのホテル稼働状況をみしてみる。

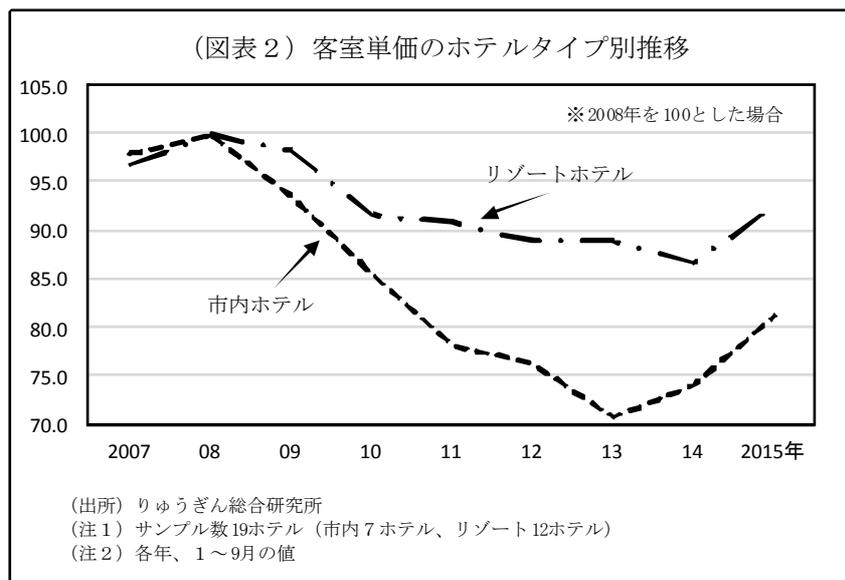
なお、年別推移では2007年から継続的に調査を行っている19ホテル（市内7ホテル、リゾート12ホテル）を対象とし各年の1～9月を抽出したものであり、弊社が過去に公表したホテル関連の数値とは相違があることに注意されたい。

2. ホテル稼働状況

県内主要ホテルの稼働状況を見ると、客室稼働率は2007年をピークにその後低下し、2011年には66.3%まで落ち込んだ。2012年以降は上昇し、2015年は81.1%とリーマンショック前のピーク時を上回る水準で推移している。一方の宿泊客室単価は、客室稼働率が上昇した3年後の2015年から上昇基調に転じているものの、リーマンショック前のピーク時の水準までは回復していないことが分かる（図表1）。現状のホテル稼働状況は、需要の高まりをうけて客室稼働率に加えて客室単価も上昇しており、ホテル業界全体が好調であることを示している。



客室単価の推移をホテルタイプ別でみると、①リゾートホテルは2014年を底に上昇傾向にあること、②市内ホテルは客室単価の低下が著しかったものの、2013年を底に上昇傾向にあることが分かる（図表2）。市内ホテルでは、リーマンショック以降、ホテル数の増加のため限られた需要を奪い合う形で競争が激化し、その影響などを受けて客室単価は下降していた。しかし、外国人観光客をはじめとした観光客の増加などを背景にリゾートホテルより1年早く上昇に転じている。

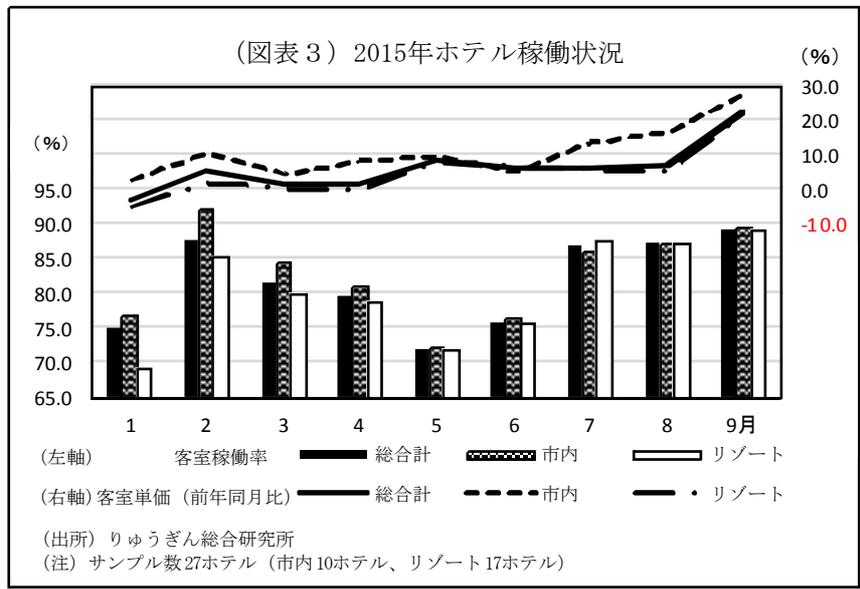


2015年の月別推移をみると、①9月の客室稼働率が8月を上回っていること、②リゾートホテルと比較し市内ホテルの客室単価の前年比の伸び幅が大きいことが特徴として挙げられる（図表3）。

通常、県内ホテルは8月がトップシーズンで客室稼働率、客室単価ともに年間で最も高い数字となるが、2014年および15年の客室稼働率は8月と比較して9月の方が高い。8月は高稼働であることから、客室稼働率よりも客室単価重視の運営にシフトしている動きが見受けられる。

リゾートホテルと比較し市内ホテルの客室単価の伸び幅が大きい要因は、買い物目的で訪れる外国人観光客の多くが市内ホテルに好んで宿泊する傾向にあることや、空港に近いという利点からリゾートホテルよりも台風の影響が小さかったことなどが挙げられる。

また、通常、外国人観光客は国内客よりも低く室料の価格設定がされているが、少しずつではあるものの国内客の価格水準に近づいている。外国人観光客向けの室料の上昇も、全体の客室単価上昇に寄与している。旺盛な旅行需要を背景に、ホテル業界では室料を上げる機運が高まっていることが分かる。



3. まとめ

客室稼働率はリーマンショック前のピーク時を上回る水準で推移している一方、客室単価はリーマンショック前のピーク時の水準に回復するまでには多少の時間を要するとみられる。客室稼働率は高止まりの傾向もみられ、需要の高まりに供給が追いつかない事態が懸念されるなどの課題はあるものの、総じてホテル稼働は好調に推移しているといえよう。